

# もう一人のアルベルチース<sup>\*)</sup>

——プルーストとバルベール・ドールヴィー——

青 柳 り さ

## 序

語り手がアルベルチースにバルベール・ドールヴィーの魅力を語る場面がある。

(...) ce serait par exemple, si vous voulez, chez Barbey d'Aurevilly une réalité  
cachée révélée par une trace matérielle, <sup>(b)</sup>la rougeur physiologique de l'En-  
sorcelée, d'Aimée de Spens, de la Clotte, <sup>(a)</sup>la main du *Rideau cramoisi*, les  
vieux usages, les vieilles coutumes, les vieux mots, les métiers anciens et sin-  
guliers derrière lesquels il y a le Passé, l'histoire orale faite par les pâtres au  
miroir, les nobles cités normandes parfumées d'Angleterre et jolies comme  
un village d'Écosse, des lanceurs de malédictions contre lesquelles on ne peut  
rien, la Vellini, le berger, une même sensation d'anxiété dans un paysage, que  
ce soit la femme cherchant son mari dans *Une vieille maitresse*, ou le mari de  
*L'Ensorcelée*, parcourant la lande, et l'Ensorcelée elle-même au sortir de la  
messe<sup>(1)</sup>.

プルーストは実に適確に作家の特性を指摘する。見事な批評家としての目である。しかし、それと同時に、その作家（芸術家）の魅力をまた実に見事に作品の中に取り込んでいく。それは、もはやパステリッシュではなく、プルーストの文体となり、プルースト文学の魅力となっている<sup>(2)</sup>。引用文中から、(a)『緋色のカーテン』の手、(b)「呪縛された女」の、エメ・ド・スパンスの、ラ・ク

ロットの紅潮、(c) (ノルマンディーの) 土地の魅力、という三点を中心にブルーストとバルベール・ドールヴィイについて、ブルーストの文章の中に取り込まれているバルベールの魅力について考察したい。

## 1. アルベルチヌの手 (アルベルチヌという名前)

第一に『緋色のカーテン』の手についてだが、これは、語り手が、恋人のアルベルチヌに向かって、バルベールのアルベルチヌ (以下、アルベルト) の手の魅力を語るという設定である。この「アルベルチヌ」という名前の一致は全くの偶然なのだろうか？

ここでまず注目しておきたいことは、「アルベルト」という呼び名である。バルベールのアルベルチヌは、はじめの2度を除いてアルベルトで通されている。そしてこのアルベルトという呼び名によって、「ジルベルト・アルベルト・アルベルチヌ (Gilberte・Alberte・Albertine)」という図式が成立するのである。ジルベルトとアルベルチヌの名前の重なりは、『失われた時』の後半の重要なテーマの一つである<sup>(9)</sup>。がまた、綴ってみると、この2つの名前は実際にはなかなか重ならない。間にアルベルトという名前が入ったとしたら…。これもまた単なる偶然なのだろうか？

そこで少し名前にこだわってみたい。というのも、アルベルチヌという名前は今日、決してありふれた名前ではなく、非常に古めかしい印象を与えるらしいし、当時、ブルーストの時代においても何か高貴な名前 (名前のモデルとなった人々として、アルベルチヌ・ド・モンテペロ、アルベルチヌ・ド・ブルーニュ大公妃、アルベルチヌ・ド・スタール夫人らが挙げられている)<sup>(10)</sup> であって、アルベルチヌの属していたブルジョワ階級には、そぐわないものだったようだからである。このことはバルベールのアルベルト (アルベルチヌ) にも共通しているようであり、彼女の登場の場面にそれを見てとることができる。

Mlle Albertine (c'était le nom de cette archiduchesse d'altitude, tombée du ciel chez ces bourgeois comme si le ciel avait voulu se moquer d'eux), Mlle Albertine, que ses parents appelaient Alberte pour s'épargner la longueur du nom, mais ce qui allait parfaitement mieux à sa figure et à toute sa personne, ne semblait pas plus la fille de l'un que de l'autre...<sup>(5)</sup>

彼女はベラスケスの『スペイン犬を連れた王女』のごとき、高慢でも、侮蔑的でも、横柄でもない、ただ無感動な様子をしており<sup>(6)</sup>、「アルベルチヌ」という高貴な名前を持っている<sup>(7)</sup>。スペイン王女、大公妃《archiduchesse》と形容され、その両親のどちらの娘とも見えない<sup>(8)</sup>。彼女を両親はむしろアルベルトと呼んでいるのである。

さらに、これらの名前について、*Le Temps des Jules, Les Prénoms en France au XIX<sup>e</sup> siècle*<sup>(9)</sup> で確認したところ、アルベールという名前が 315 あるのに対し、アルベルチヌという名前は82、アルベルトは, moins de 10 fois, ジルベルトに関しても、ジルベールが45であるのに対し, monis de 10 fois と、非常に少ないことがわかる。また、これらの名前は、アルベール、ジルベールという男性名からできており、ホモセクシュアルを連想させる名前である。それほど自然な名前ではないということになる。そしてアルベルチヌの名前に関して、シモネの n が 1 つか 2 つかとこだわったプルーストが<sup>(10)</sup>、ジルベルト、アルベルチヌという彼女たちの名前については言及していないことも気にかかってくる。

アルベルチヌ、アルベルト、ジルベルト、彼女たちに関しては、目の色、髪の色、その意外なたくましさ、謎の女、魔性の女《femme fatale》の側面、ノルマンディー（土地）の魅力等、いくつかの共通点を挙げることができるが、ここでは、プルーストが評価したバルベールの「アルベルトの手」の箇所をとり挙げたい。近よりがたき無感動の仮面をかぶった美女、アルベルトの欲望は、かくのごとく表出するのである。

Je crus que j'allais m'évanouir ... que j'allais me dissoudre dans l'indicible vo-

lupté causée par la chair tassée de cette main, un peu grande, et forte comme celle d'un jeune garçon, qui s'était fermée sur la mienne<sup>47</sup>.

ここで、突然、テーブルの下で「私」の手を握り締めたのは、そのほっそりした外貌にそぐわない「少年のように少し大がらで力のこもったアルベルトの手」であった。それは「眠っているアルベルチースの太いがっしりした首<sup>48</sup>」を想像した時の奇妙にエロティックな印象と共通する。

さらに、アルベルトは、「私」に足をからませる。

Celle de Mlle Alberte quitta donc la mienne ; mais au moment où elle la quitta, son pied, aussi expressif que sa main, s'appuya avec le même aplomb, la même passion, la même souveraineté, sur mon pied, et y resta tout le temps que dure ce dîner trop court, [...] <sup>49</sup>.

ここに眠っているアルベルチースに足をからませる話者の姿<sup>50</sup>を見るのは筆者だけであろうか？

## 2. 紅潮について

第二に「隠されていながら物質的な痕跡によって露頭してしまう現実、呪縛された女の、エメ・ド・スパンスの、ラ・クロットの紅潮」というプルーストの指摘についてだが、この箇所について、中条省平氏が「ラ・クロットが「紅潮」するというのはプルーストの記憶ちがいである<sup>51</sup>」ことを指摘している。この「記憶ちがい」というのは、一つの興味ある現象である。「赤」あるいは「紅潮する」ということに、プルーストの何か思い込みがあって、バルベールがプルーストの中で変質していった、プルーストの中に入り込んでいった過程であるとも考えられるからである。

まず、プルーストがバルベールに関して指摘した紅潮が、そのままの意味でプルーストの作品中にとりいれられている例として、サン・ルーの生理的紅潮を挙げることができる。プルーストが意識していたにせよ、していなかったにせ

よ、エメ・ド・スピンスの紅潮<sup>99</sup>と共通するものである。

Dans le cas où Aimé ne se fût pas trompé, la rougeur de Saint-Loup quand Bloch lui avait parlé du lift ne venait peut-être pas seulement de ce que celui-ci prononçait «laift». Mais j'étais persuadé que l'évolution physiologique de Saint-Loup n'était pas commencée à cette époque et qu'alors il aimait encore uniquement les femmes<sup>100</sup>.

この部分は、まさしく、隠されていたサン・ルーの悪癖が、本人も気がつかないうちに、彼の内から、外へあらわれたことを示す文章である。

さらにアンドレが語るアルベルチヌの「ばいかうつぎ《seringa》」のエピソードもこのヴァリエーションである。

«[...] En tous cas on n'a plus pu jamais parler de seringa devant elle (=Albertine) sans qu'elle devint écarlate et passât la main sur sa figure en pensant cacher sa rougeur.»<sup>101</sup>

「ばいかうつぎ」の花は、語り手にみつきりそうになったアンドレとの同性愛の場面<sup>102</sup>を示唆しており、だからこの言葉に、アルベルチヌは顔を赤らめたのである。

プルーストが、バルベーに関して、ノートを残しているのは、1908年のカルネで、そこでは、バルベーとともに、繰り返しノルマンディーの赤いオルタンシアがあがっている（これはネルヴルのものらしい）<sup>103</sup>。「緋色のカーテン」は赤である。バルベーのノルマンディー小説集の著しい特徴は〈赤〉のイメージの氾濫ぶりだということである<sup>104</sup>。

ところで、プルーストの指摘した赤の魅力は、次には、プルーストの作品の中で、プルーストの旋律で、脈打っていくことになる。プルーストが、バルベーの魅力として指摘した、「赤くなる」ということは、次第にプルーストらしい、特別な意味をもっていく。プルーストにおいて「紅潮する」のは人だけではない。白いさんざしが赤いさんざしにかわったとき、ばら色のそばかすを顔

に浮かべたジルベルトが現れる。また、バルベックの乙女たちの一団は「ペンシルヴェニア・ローズの茂み」として現れ、「ばら色の花の群れ」となり、そして、語り手は「アルベルチースのばら色のほお」を見いだすことになる。ばら色を帯びるとき、語り手の欲望の対象となっていくわけである<sup>89</sup>。語り手が、ジルベルトへの思いが自分のなかで死んでしまったことを確認し、ジルベルトからアルベルチースへと心を移すとき、語り手はジルベルトからもらった、「めのう色のビー玉《bille d'agate》」をアルベルチースに差し出す<sup>90</sup>。アルベルチースが、語り手のもとを去ったとき、彼女が残していった指輪は、鷲の彫刻のある赤いルビーだった。語り手は、その鷲が自分の心臓をつしばむようだと知っている。ルビーの赤が血の色を連想させて、残酷な印象を与える<sup>91</sup>。ラシエルに真珠の首飾りがよく似合うように<sup>92</sup> アルベルチースはルビーでなくてはならない気がする。

プルーストはバルベールの文章の魅力の一つに〈紅潮〉というものをあげたわけだが、それがプルーストの中で、女性の魅力として、人間以外のものにまで及んでいく様子が確認できる。

### 3. 土地（ノルマンディー）の魅力

第三には、土地の魅力というものがある。「バルベールは、ミシュレがかつて「青ざめたイギリス」と呼んだノルマンディー地方に横溢する幻想的風土をピトレスクな筆致で描き出した作家であった」と、吉田城氏が「バルベール・ドールヴィイとノルマンディーの伝説」<sup>93</sup>において述べておられるように、アルベルトにもノルマンディーの空気というものがそなわっている。バルベール・ドールヴィイのノルマンディーを語るに、*Les Diaboliques* が最適というわけではないが、それでも、この六つの短編の舞台は、一つ、パリを除いて、残りの五篇はノルマンディーであり、このアルベルトの物語は、舞台をノルマンディーのある一つの田舎町（コタンタン半島のヴァローニュと言われているが）と



しているようである。彼女には、そのノルマンディーの空気のようなものがそなわっていて、それが彼女の冷たい不可解な魅力となっている。それは、背景としてバルベック（それは半ばノルマンディーだが）、バルベックの海を背負ったアルベルチースと、自然と重なってくる。パリにいる彼女は次第にかつての面影を失っていくかに見えるが、眠っているアルベルチース（最も美しい彼女）には、海のうねりとざわめきもどってくる。彼女は、土地の魅力、土地の色、土地の空気を、その死後もずっとそなえていた。

そういえば、作品冒頭、語り手が、まだ見ぬジルベルトを愛しはじめたとき、彼はジルベルトに、大聖堂と、イル＝ド＝フランスの丘と、ノルマンディー平野の魅力を重ねていたことが思い出される。

## 結 論

ロラン・バルトは「名前の決定と同時に『失われた時』は書かれた」と、言っている。スワンの名前が決まった頃、プルーストは、本当に、慈しむようにスワンを「シュワース」と発音していた、というエピソードもある。プルーストが名前をどれほど大切にしていたか、いまさら、言うまでもない。そのプルーストが、ジルベルトとアルベルチースという奇妙な名前を選んだのである。1910～12年には、すでに、アルベルチースもジルベルトも、名前をもって存在している。しかし、1908年には、まだマリアという少女だった。しかしまた、1893年の『時評集』には、海辺で遊ぶ誰ともわからない少女たちに、すでに大公妃のイマージュがつきまとっている。アルベルチースは、1893年から名前をもたず、すでにそこにいたのである。

プルーストが、バルベー・ドールヴィイについてノートを残しているのは、1908年のカルネであり、そして、そのカルネに最も多くノートされているのは、ネルヴァルに関する覚書である。プルーストのなかで、バルベー・ドールヴィイの魅力とネルヴァルの魅力、すなわち、土地の魅力と赤の魅力が混然

一体となっているかのようである。

シルヴィーの赤、I という母音の赤が、アルベルトの緋色のカーテンと混ざりあったとき、アルベルトが、アルベルチヌにそしてジルベルトに変わったと考えられないだろうか。バルベール・ドールヴィイのアルベルトが、ネルヴァールのI という赤い母音をつれて乗り込んできた、実体と名前が一体になって小説世界に乗り込んできた、それは、他の名前ではありえなかった。そして、この奇妙な名前たちが、プルーストの小宇宙を構成している。スワンとオデット<sup>83</sup>、ジルベルトとアルベルチヌという組み合わせ、現実と夢の混淆した土地の名<sup>84</sup>、今はやっているレストランと10年前に閉じられたレストランの同時存在<sup>85</sup>、いかにもありそうでありえない存在たち、奇妙な、ありえない世界である。プルーストが創作過程ですべりこませた、一見何でもない、読み過ごされてしまいそうなこれらの素材は、実はこのような意外性を含みつつ、独自の小説世界を構築しているのである。

#### 注

\*) テキストは、Marcel Proust, *A la Recherche du temps perdu*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 4 vol, 1987, 1988, 1988, 1989 を使用した。以下、本書からの引用については、巻をローマ数字で、各篇のタイトルを以下の省略記号で記す。

Abréviation : Sw. : *Du côté de chez Swann* ; JFF : *A l'ombre des jennes filles en fleurs* ; Gu. : *Le Côté de Guermantes* ; SG : *Sodome et Gomorrhe* ; Pris. : *Prisonnière* ; AD : *Albertine disparue* ; TR : *Le Temps retrouvé*.

- (1) III, AD, pp. 877-8.
- (2) 拙論「『花咲く乙女たちのかげに』におけるボードレールの「通りすぎた女へ」」『年報フランス研究 20』, 関西学院大学フランス学会 1986, 参照。
- (3) IV, AD, pp. 234-5.
- (4) George D. Painter, *Marcel Proust*, 2 vol, traduction française, Mercure de France, 1963. (ジョージ・D・ペインター, 『マルセル・プルースト伝記下巻』, 岩崎力訳, p. 77.)
- (5) Barbey d'Aurevilly, 《Le Rideau cramoisi》 dans *Les Diaboliques, Œuvres romanesques complètes II*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1966, p. 32.



- (6) *Ibid.*, p. 31.
- (7) この「アルベルチース」という名前はザクセンの貴族の一列を示す。(吉田城, 「寡黙なアルベルチース」『ブルースト研究会報告 13』, 1990)
- (8) そういえば、『失われた時』のアルベルチースには両親がいない。
- (9) Jacques Dupâquier, Jean-Pierre Pélissier, Danielle Rébaudo, *Le Temps des Jules, Les Prénoms en France au XIX<sup>e</sup> siècle*, Edition Christian, 1987.
- (10) II, *Gu.*, pp. 663-4.
- (11) Barbey d'Aureville, «Le Rideau cramoisi» dans *Les Diaboliques*, ed. ct., p. 33.
- (12) III, *Pris.*, p. 585.
- (13) Barbey d'Aureville, «Le Rideau cramoisi» dans *Les Diaboliques*, ed. ct., p. 34.
- (14) III, *Pris.*, p. 580.
- (15) 中条省平, 「最後のロマン主義者, バルベール・ドールヴィイの小説宇宙 1」, *Marie Claire Japon N° 88*, 中央公論社, 1990, p. 247.
- (16) Barbey d'Aureville, «Histoire d'une rougeur» dans *Le Chevalier des Touches, Œuvres romanesques complètes I*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1964, pp. 858-70.
- (17) IV, *AD*, p. 261.
- (18) *Ibid.*, p. 181.
- (19) III, *Pris.*, pp. 563-4.
- (20) Etabli et présenté par Philip Kolb, *Cahiers Marcel Proust 8, Le Carnet de 1908*, Gallimard, 1976, p. 61.
- (21) 中条省平, 「最後のロマン主義者, バルベール・ドールヴィイの小説宇宙 4」, *Marie Claire Japon N° 89*, 中央公論社, 1990, p. 285.
- (22) 熊田 都, 「ジルベルトとアルベチースーまたは遍在する薔薇ー」, 『立教大学 フランス文学 12』, 1983.
- (23) III, *SG*, p. 135.
- (24) IV, *AD*, pp. 45-8.
- (25) 拙論「ラシェルの真珠の首飾り」, 『ブルースト研究会報告 11』, 1990.
- (26) 吉田 城, 「バルベール・ドールヴィイとノルマンディーの伝説」, 『ソムニウム』, 1980, p. 50.
- (27) III, *AD*, pp. 577-83.
- (28) I, *Sw.*, p. 99.
- (29) Roland Barthes, *Nouveaux Essais critiques*, Seuil, 1972.
- (30) George D. Painter, *Marcel Proust, 2 vol*, éd. cit.

- ③1) Etabli et présenté par Philip Kolb, *Chahiers Marcel Proust 8, Le Carnet de 1908*, éd. cit.
- ③2) 『白鳥の湖』である。
- ③3) I, *Sw.*, pp.376-87.
- ③4) 海野 弘, 「プルーストの部屋」, *Marie Claire Japon N° 80*, 中央公論社, 1989, pp.231-2.

本論文は、1990年3月、プルースト研究会にて発表、同10月、研究報告として提出したものに、引用、注、及び、新たな考察を加え、論文としてまとめたものである。

(関西学院大学非常勤講師)